

NGHIÊN CỨU VỀ CÁCH PHÁT ÂM TIẾNG NHẬT CỦA NGƯỜI VIỆT: TIẾP CẬN TỪ NGÔN NGỮ HỌC SO SÁNH ĐẾN NGỮ ĐIỀU (ベトナム人日本語学習者に対する日本語音声の研究: 音声リズムの比較言語 的アプローチから)

Sakata Hisashi (坂田 恒)

Khoa Ngôn ngữ và Văn hóa phương Đông, Trường Đại học Ngoại ngữ-Tin học TP.HCM
hisashi@huflit.edu.vn

TÓM TẮT— Bài viết này nghiên cứu ngữ âm tiếng Nhật dành cho người Việt học tiếng Nhật với phương pháp so sánh đối chiếu ngôn ngữ, tập trung chủ yếu vào nhịp điệu lời nói. Vì người Việt học tiếng Nhật thường gặp vấn đề khi phát âm tiếng Nhật nên yêu cầu lớn thường được đặt ra đối với giáo viên người Nhật tại Việt Nam là giúp cải thiện khả năng phát âm của người Việt học tiếng Nhật. Ngoài ra còn có một số lý do thực tế khác, chẳng hạn chứng minh khả năng thông thạo tiếng Nhật trong các cuộc phỏng vấn xin việc do nhu cầu của công dân Việt Nam tìm kiếm cơ hội việc làm tốt hơn. Hiện có rất ít nghiên cứu hoặc bài giảng ngữ âm tiếng Nhật cho người Việt, đặc biệt là trong lĩnh vực ngôn ngữ học so sánh. Người ta không chứng minh được các ngôn ngữ trên thế giới đều được phân chia thành hai cực khác nhau. Có một số phương pháp để quan sát nhịp điệu của ngôn ngữ mà không phải là phương pháp luận phân chia làm hai cực, trong khi nhiều nghiên cứu vẫn chỉ khẳng định tính ưu việt của phương pháp luận phân chia làm hai cực. Bài viết này thiên về sử dụng phương pháp PVI (Pairwise Variability Index) để quan sát nhịp điệu. Dù vậy, hiện không có thông tin về việc xây dựng nhịp điệu ngôn ngữ bắt nguồn từ chỉ số PVI và vì thế bài viết này cũng không cung cấp được thông tin về việc xây dựng nhịp điệu ngôn ngữ bắt nguồn từ chỉ số PVI. Nghiên cứu này không chỉ so sánh tiếng Việt và tiếng Nhật mà còn mở rộng so sánh với tiếng Anh, tiếng Pháp. Theo kết luận của một nghiên cứu trước đây: “Nguyên nhân của sự hỗn loạn nhịp điệu âm tiết tiếng Nhật của người Việt khi nói tiếng Nhật là do bản chất ngôn ngữ đơn âm của tiếng Việt”. Tuy nhiên, như đã nói ở trên, không thể biết cấu tạo của nhịp điệu từ quan điểm sự phân chia làm hai cực. Do đó, nghiên cứu này muốn khẳng định rằng sự phân chia hai cực không phải là lý do tồn tại của các ngôn ngữ đơn tiết như tiếng Việt mà thực chất là nguyên nhân của ngôn ngữ có nhịp điệu như tiếng Việt.

Từ khóa— Ngữ âm, học tiếng Nhật của người Việt, ngôn ngữ học so sánh, quan sát nhịp điệu.

I. はじめに

言語の音声指導の重要性・必要性について、ベトナムにおいて日本人講師に求められているものとし「発音の向上」が全体として最も多い割合を占めている [8, p. 109]。第二言語の音声の習得を独学で行う事は困難を伴うからである。またベトナムにおいて日系企業や日本企業、またはそれらをビジネス相手とする企業への「就職や職場での有利な待遇を目的とする日本語学習者が増加して」 [19] おり、採用面接等では日本語の発音は一つの日本語能力の指標として参考にされていると思われる。しかし、日本語教育全体を見ても音声教育に関しては指導法が確立されていない [14, p. 109]。本稿ではベトナム人日本語学習者に対する日本語音声指導に音声リズムに関する比較言語的アプローチを試みる。

II. 問題と目的

ベトナム語と日本語の音声についての言語比較研究はまだ殆ど行われておらず、数少ない音声指導に関する先行研究の多くは、池田 (2008) や Ngan (2015) のように双方の言語の比較からの視点に欠けている。技能実習生や日本に留学するために日本語を勉強している学習者は、短期間で最大の学習効果を期待しているのは勿論、ベトナムの大学で日本語を勉強している大学生も、学習時間に日本語能力がついてこなければ学習意欲を持続させることは難しいであろう。学習者の母語と習得目標言語の相違点と類似点に留意することは高い学習効果を達成するために必要不可欠であると同時に、教室内の学習者の母語が単一言語の場合とはとても効果的な方法である。しかし、日本語教育の世界では直接法が注目された時期が長かったこともあり、これまであまり積極的に研究が行われてこなかった。勿論指導側にも、発音の複雑さから習得が困難とされるベトナム語の知識や能力が必要であることも1つの要因であると考えられる。

ベトナム人日本語学習者の日本語音声に関する先行研究については、松田・吉田・金村 (2019) による PVI 値を用いた研究があるが、ベトナム人学習者が日本語の文章を音読した際の PVI の値を測定しており、そもそものベトナム語の PVI 値が示されていない。そのため、ベトナム人日本語学習者が日本語の文章を読んだ際の PVI 値と日本語母語話者の PVI 値の違いがどこから来るのかが明らかになっていない。それにもかかわらず「ベトナム人学習者は、音節リズムであるベトナム語のリズムにあてはめて日本語を発音しよ

うとする傾向があり」 [13, p.267] と結論付けている。同じ音節リズムといっても、ベトナム語とフランス語、スペイン語などの言語は音声リズムに大きな差があり、ベトナム人日本語学習者の日本語の音声リズムは、果たして本当に音節リズムから来るものであるのかという疑問が残る。音声リズムを音節リズムと強勢拍リズムに分類するというのは、音声リズムにおける等時性は必ずしも確認できないことから [4]、世界の言語を音節リズムと強勢拍リズムに二等分することが出来るのかどうかという疑問が投げかけられてから久しい [12, p.5]。それにも関わらず、未だにその分類を前提として論述されているものも多く見受けられる。

また第二言語の音声の習得を独学で行う事は、とても困難を伴う。人間は、生まれてから「6 か月頃になると」第一言語「特有の母語の知覚ができるようになり、9 か月頃には言語特有の音の組み合わせがわかってくる。そうすると、外国語の子音を弁別することが出来なくなる [11, p7]。つまり、子どものことばの発達は、まず音から始まり、母語の音韻の心的表象形成が行われ、同時に自分の言語以外の音に対する感受性は失われてしまう。具体的には、日本人であれば「乳児の段階で、英語の /r/ と /l/ の区別」は必要でなくなり、韓国語が母語であれば「清音と濁音」の区別は必要でなくなり、出来なくなる [11, p.26]。このように、学習者自身の知覚の範囲外である外国語の音声の正誤を自身で判断することは困難である。このことは、音声リズムも例外ではないのではないだろうか。このように日本語学習者に対する音声指導は重要であり、必要であると言える。しかし、日本語教育全体を見ても音声教育に関しては指導法が確立されていない [14, p.109] のが現状であり、ベトナム人日本語学習者に特化したものはなおさらである。

畠山 (2012) [8, p.109] が行ったアンケート調査によると、ベトナムにおける日本人講師の必要性とし「発音の向上」が全体で最も多い割合を占めている。石田 (2018) は、「長期的に日本語母語話者の発音を聞いても学習者の発音が向上しないことがほとんどであろう」と述べており [10, p.47]、Abercrombie (1961) も、「音声リズムは、母語と目標言語のリズムの違いを聞いて分析し、そして練習しなければ、その習得の成功の可能性は低い」と述べている [1, p.98]。これらのことから「聞く」だけでは不十分であり、前述した様に先ずは外国語の音やリズムの存在を知覚するところから始めなければならないと言える。その習得を助けることが、本当の意味での日本人日本語教師の存在意義として認められるのではないだろうか。Đỗ Hoàng Ngân (2015) がベトナム 4 校の大学に在籍する日本語・日本学を専攻の 2・3・4 年生 533 名を調査、分析した長音と促音の知覚の調査でも、以下の [表 1] のように日本語学習歴が長くなっても大きな改善が見られないことが分かる。

〔表 1〕学年別発音パターンによる正解率 (%)

発音のパターン	2 年生(192 名)	3 年生(183 名)	4 年生(158 名)
きこ (高低)	68.75	62.11	68.78
きこ (低高)	69.27	71.77	73.21
きいこ (高低低)	61.46	60.84	51.69
きいこ (低高低)	69.97	67.03	66.67
きいこ (低高高)	67.88	62.48	56.12
きこう (高低低)	42.01	35.70	43.46
きこう (低高低)	58.85	65.39	70.25
きこう (低高高)	70.83	78.14	81.86
きっこ (高低低)	77.26	80.87	82.28
きっこ (低高高)	89.06	86.52	90.30

(【出典】 [3, p.33] より坂田作成)

ベトナムにおいて日系企業や日本企業、またはそれらをビジネス相手とする企業への「就職や職場での有利な待遇を目的とする日本語学習者が増加して」 [20] おり、これは大学生においても例外ではないであろう。そのような企業の採用面接において、日本語の発音の正確さや自然さは短時間で就職希望者の日本語能力を知るための大きな基準であり、可否の重要な判断材料になっていると思われる。

本稿では、ベトナム語と日本語の差異も考慮し、ベトナム人日本語学習者に対する効果的な音声指導を主に音声リズムの面から考えていく。そうしてベトナム人日本語学習者に対する音声指導法の発展、ベトナム人日本語学習者の日本語能力の向上につながるはずである。

III. 日本語の音声リズム

日本語を記述するリズム単位としてモーラ(拍・*mora*)、音節(*syllable*)そしてフット(韻脚・*foot*)が存在する [17, p. 208]。

モーラとは「ある母語の話し手が、同じ長さで発音される、と考えている音のまとまり」 [6, p.71] のことである。撥音、促音、長音、二重母音の後半の 4 つの特殊モーラが存在する。また「日本語ではモーラが基本的に仮名文字と対応し、「きゃ、きゅ、きょ」のような拗音を除くと 1 対 1 の対応をみせ」 [12, p.6] 特殊モーラも 1 つの文字として対応している。

しかし、「日本語を母語としない学習者には『拍』という単位はなかなか身につかない」 [18, p.77] と言われ、さらに「日本語母語話者は単に『各拍は同じ長さを持つ』と見なしている」 [18, p.78] だけであって「学習者にとって知覚」 [18, p.78] しにくいという事は留意しておく必要がある。

《日本語におけるモーラの例 1》

お・は・よ・う・ご・ざ・い・ま・す



〔図 1〕日本語におけるモーラの例 2

音節とは「英語の *syllable* を訳出したもの」で「ギリシャ語に由来している。英語の *syllable* もこの原義をとどめ『一つ一つの音を束ねたもの』という意味を持っている。」 [12, p.7] 音節の機能的な定義「単語を分節する」である [12, p.7]。日本語における音節は「実際に聞いたときのまとまり」であり「拍よりも一つ上の概念」 [6, p.79] である。また「『音節』と『モーラ』の間に食い違いが生じるのは、撥音(ん) 促音(っ) 長音(ー) 二重母音の後半「べイ、エイ」という 4 つの要素が独立したモーラ(長さの単位)を形成しながらも独立した音節を形成しない」 [12, P. 7] からである。上記の 4 つの要素、つまり特殊モーラを含むものを「長音節」、そうでないものを「短音節」と分ける。

《日本語における音節の例 1》

お・は・よう・ご・ざ・い・ま・す ※下線は長音節



〔図 2〕日本語における音節の例 2

しかし、音節において英語における音節の機能的な定義は「単語を分節する」 [12, p.7] であり、この定義から言えば日本語においてはモーラもその機能を持っていると言える。加えて〔図 2〕と〔図 3〕を比較したときに、英語と日本語において、その同じ用語を使って定義にすることの正当性について疑問が残る。

《英語における音節の例 1》

Dif · fi · cult



〔図 3〕英語における音節の例 2

フットとは、音韻的な長さの単位としてのモーラという概念であり、2モーラを一つのまとまりとし、それが1フットとして扱われるという考え方である [12, p.9]。

《日本語におけるフットの例1》

おは・よう・ござ・いま・す口

フットの視点から、強勢拍リズムの英語と比較した際に、以下のように日本語は比較的単純なリズムであると言える。



〔図4〕英語におけるフットの例【出典】大高、神谷(2013)p18に基づき坂田作成

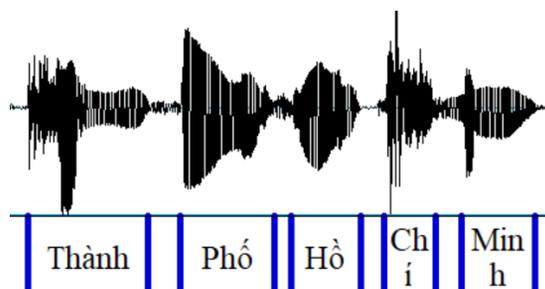


〔図5〕日本語におけるフットの例2

IV. 日本語とベトナム語の音声リズムの比較

日本語は音声リズムにおいて、モーラ拍リズム (mora-timed rhythm) に分類され、一方ベトナム語は音節拍リズム (syllabeled-timed rhythm) に分類されている。モーラとは日本語の音声の固有の単位だと考えられることも多いが、特殊拍の存在を除けば日本語もベトナム語と同じ音節拍リズムの一種と言える [15, p.17] という意見もある。

実際のベトナム語のリズムの具体例として〔図6〕の Thành Phố Hồ Chí Minh の音声の波形を挙げる。Thành phố の各音節は Hồ Chí Minh の各音節より長く発音されているのが分かる。さらに Hồ は単体で発音され後続の Chí と Minh は連続して発話されている。また Chí は Hồ より短く発音され、かつ Minh は nh の前に来る母音は短母音化するというベトナム語のルールに従って母音は短く発音されている。



〔図6〕Thành Phố Hồ Chí Minh の録音波形

同じ音節リズムとされるフランス語やスペイン語と違い Tôi đang sống ở thành phố Hồ Chí Minh のように1音節 (1 âm tiết) ごとに間隔をあけて表記するベトナム語は、文字で1モーラ毎に分けられる日本語と視覚的に似ているといえる。例外として外来語は socola のように表記することも多いが、sô-cô-la, sô cô la のように音節毎に分けた表記も一般的に使われている。

反対に両言語の差異として挙げられるのは、多くの言葉が1音節ないし2音節で意味を持つベトナム語に対し、3モーラ以上、もしくは3音節以上の単語も、日本語では一般的であるという事である。

共通の漢字由来のベトナム語と日本語の語彙の例

文化 (2 音節/3 モーラ) Văn hóa (2 音節)	物理 (3 音節/モーラ) Vật lý (2 音節)
日本 (2 音節/3 モーラ) Nhật Bản (2 音節)	理由 (2 音節/3 モーラ) Lý do (2 音節)
電話 (2 音節/3 モーラ) Điện thoại (2 音節)	科学 (3 音節/モーラ) Khoa học (2 音節)
ベトナム (4 音節/モーラ) Việt Nam (2 音節)	学生 (3 音節/4 モーラ) Học sinh (2 音節)

また、フランス語由来の語彙もベトナム語では以下の例のように少ない音節に短縮される傾向がある。

フランス語由来のベトナム語の例

Chemise (3 音節) sơ mi (2 音節)	Gare (2 音節) ga (1 音節)
Valise (3 音節) va li (2 音節)	Café (2 音節) cà phê (2 音節)
Cravate (3 音節) cà vạt (2 音節)	Fromage (3 音節) phô mai (2 音節)

このように、ベトナム人母語話者にとって 3 音節以上の単語というのは、感覚的に長く感じられることが予想され、またそこから音節が長くなればなるほど音声リズムの乱れが大きくなる可能性がある。

前述のように音声リズムにおける等時性は必ずしも確認できないことから、それまでの音節リズムと強勢拍リズムという分類にかわるものとして提示された分析方法の一つに Grabe & Low(2002) の Pairwise Variability Index (PVI) がある。これは「母音の長さ(持続時間)の観点から、その変動の大きさの度合いによって言語リズムをとらえようとする」 [16, p.3] ものである。

〔表 2〕 各言語の PVI 値

言語	PVI
タイ語	65.8
オランダ語	65.5
ドイツ語	59.7
英語 (イギリス英語)	57.2
ポーランド語	46.6
ベトナム語	44.2
フランス語	43.5
日本語	40.9
スペイン語	29.7
中国語	27.0

【出典】 [5, p.48] に基づき坂田作成

松田・金村・吉田(2019)が「ベトナム人学習者は、音節リズムであるベトナム語のリズムにあてはめて日本語を発音しようとする傾向があり」 [13, p.26] と述べるように PVI の値から見てもベトナム語は音節リズム的言語だと言え、PVI の値自体も日本語と近い。しかし PVI の値が実際の音声リズムの指導にどれだけ有効かということには疑問が残る。例えば以下の〔図 7〕と〔図 8〕のように、異なる二つのリズムは PVI の算出方法だと同じ値になるからである。



〔図 7〕

〔図 8〕

このように PVI 値が近い言語間ですら、各言語の独自のリズムの特徴があることがうかがえる。よって、ベトナム人日本語学習者のモーラの乱れは、音節リズムではなく他に原因があるはずである。つまり「音節リズムであるベトナム語のリズムに当てはめて日本語を発音」しているわけではなく、単に「ベトナム語のリズム」からくるモーラの乱れだと考えられる。

V. まとめと今後の課題

音声指導、特に音声リズムにおける指導方法が確立していない理由の一つに、アクセントに比べ各言語の音声リズムの実態事態が明らかになっていないことがあると思われる。ベトナム語の音声リズムの特徴を明らかにすることにより、初めて日本語との類似点、相違点に分かり、そこから学習効果の高いベトナム人日本語学習者に対する日本語の音声指導を考えていくことが出来るのではないかと。よって、本論文ではベトナム語と日本語の比較言語学的アプローチから、いくつかの類似点と共通点を明らかにした。今回明らかにしたベトナム語の特徴、日本語との相違点と類似点をもとに、具体的な指導法を考え、実際により多くのデータを用いその精度を高めながら、その学習効果を検証することに加え、ベトナム語の特徴を確認して、そこから日本語との相違点と類似点をより深く検討することが今後の課題である。

VI. 参考資料

- [1] Abercrombie, D, *Elements of general phonetics*, Edinburgh University Press, 1967
- [2] ANH Doan Le Hoai, “ベトナム語の声調記号は日本語アクセント表か”, 第33回日本音声学会全国大会予稿集, 2019
- [3] Đỗ Hoàng Ngân, “ベトナム人学習者の日本語における長音・促音の知覚に関する問題”, *ハノイ国家大学科学雑誌-外国研究* ((*Tạp chí Khoa học ĐHQGHN: Nghiên cứu Nước ngoài*), 第31巻2号 (Tập 31: Số 2), 2015, pp31-38
- [4] Lehiste, I. “Isochrony reconsidered”, *Journal of Phonetics* 5, 1977, pp253-264
- [5] Yanin Sawanakunanon “Segment timing in certain Austroasiatic languages: Implications for typological classification”, 2013, https://www.researchgate.net/publication/259705595_Segment_timing_in_certain_Austroasiatic_languages_implications_for_typological_classification, 6/7/2022
- [6] 荒川洋平, *日本語という外国語*, 講談社 2009
- [7] 古本康子 今田ひとみ, *キクタンベトナム語【初級編】*, 2018
- [8] 畠山浩子, “ベトナムで期待される日本人日本語教師像：日本語学科在籍学生へのアンケート調査から”, *言語・地域文化研究*(18), 東京外国語大学大学院, 2012, pp101-119
- [9] 池田英喜, “日本語の音声指導事例紹介(その1): ベトナム語母語話者の場合”, *新潟大学国際センター紀要*, 新潟大学国際センター, 2008
- [10] 石田三智, “ヴェルボ・トナル法を応用したベトナム人のためのプロソディ指導”, *一橋大学国際教育センター紀要*, 2018, pp47-58
- [11] 小柳かおる, *日本語教師のための新しい言語習得概論*, スリーエーネットワーク, 2004
- [12] 窪園晴夫, “モーラと音節の普遍性”, *音声研究*(2), 日本音声学会, 1998, pp5-15
- [13] 松田真希子・吉田夏也・金村久美, “ベトナム人日本語学習者の日本語発話リズム -日本語母語話者との比較-”, *日本音声コミュニケーション研究*(7), 日本音声コミュニケーション学会, 2019, pp267-272
- [14] 本橋美樹, “ひらがな表記の特性と音声教育の関連性”, *関西外国語大学留学生別科日本語教育論集*, 2018
- [15] 大高博美・神谷厚徳, “英語のリズムにおけるフットの等時性-等時性仮説の真偽検証-”, *言語と文化*(16), 関西大学言語研究センター, 2013, pp17-23
- [16] 里井久輝, *言語と音声リズム*, *龍谷理工ジャーナル*(24), 龍谷大学理工学会, 2012, pp1-5
- [17] 田中真一, “日本語のモーラ、音節、フットと単語長：野球声援のリズム結合と外来語アクセント”, *神戸言語学論叢*(5), 神戸大学人文学研究科言語学研究室, 2007, pp207-216
- [18] 山下好孝, “リズム単位を利用した発音指導：後ろ向きフットカウントの試み”, *北海道大学留学生センター紀要*(11), 北海道大学留学生センター, 2008, pp76-89
- [19] 国際交流基金 HP, <https://www.jpff.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2019/vietnam.html>, 4.5.2022

A STUDY OF THE JAPANESE SOUND LECTURE FOR VIETNAMESE JAPANESE LEARNER: APPROACHING FROM COMPARATIVE LINGUISTICS OF LANGUAGE RHYTHM

Hisashi Sakata

ABSTRACT— This is a research of Japanese phonetics for Vietnamese learners with a comparative linguistic approach focusing specifically on language rhythm. It is important to teach the sound of Japanese (phonetics) to Vietnamese learners because it is very often that native Japanese teachers in Vietnam are requested to help “improving pronunciation”. There are also some practical reasons, such as demonstrating Japanese language proficiency skills at job interviews, a strong demand for Vietnamese those who want to seek better job opportunities. There are few existing studies on Japanese phonetics for Vietnamese learners of Japanese. This is especially the same in the realm of comparative linguistics.

It is still a common method to divide the world's language into two types of language rhythm: stress-timed language, and syllable-timed language. It is not, however, proven if the world's languages can be divided as a dichotomy as there is no isochrony of the rhythm of the languages. Still, there are several suggestions for a methodology to observe the rhythm of the languages rather than one of dichotomy while many studies still only claimed the primacy of dichotomy. This study tends towards a method of observing the rhythm of languages called “Pairwise Variability Index (PVI)”, a process that illustrates the inclination of the rhythm of languages. However, there is no existing information as of this writing on the construction of the language rhythm derived from the value of PVI. Thus, there is a question on how effective it is to use PVI in considering the rhythm of the language for teaching. This study also includes a comparison of not only Vietnamese and Japanese, but also English and French.

A preceding study has concluded that “the turbulence of Japanese mora-timed language rhythm of Vietnamese learners is caused by Vietnamese syllabled-timed language rhythm”. However, as mentioned above, it is not possible to know the construction of the rhythm from the viewpoint of dichotomy. Thus, this study claims that dichotomy is not the reason for the existence of syllabled-timed languages of Vietnamese. It is, in fact, the cause is the mother-tongue rhythm of Vietnamese learners.



MA. Sakata Hisashi

Giảng viên cơ hữu, giảng dạy tiếng Nhật, xã hội Nhật Bản, Kỹ năng thuyết trình tiếng Nhật tại Khoa Ngôn ngữ và văn hóa phương Đông, HUFLIT.

Nhận học vị Thạc sĩ Văn hóa Quốc tế tại trường Đại học Kyushu Sangyo (Nhật Bản) năm 2019; là nghiên cứu sinh tại trường Đại học Kyushu Sangyo năm 2022.

Lĩnh vực nghiên cứu: lịch sử, văn hóa, giáo dục, giao tiếp quốc tế, chính sách ngôn ngữ, ngôn ngữ học.